

## 3月5日 年間第9主日

申 5:12～15    IIコリ 4:6～11    マコ 2:23～3:6

### 1. 申

南王国ユダがバビロンの王ネブカドネツアルによって滅ぼされ、エルサレムが最終的に陥落したのはBC.587年のこととあります。数次にわたって南王国の人々、特に中・上層民の大部分が、バビロンへ捕囚として移住させられました。

このユダヤ人たちが再び母国に帰還して、主の民イスラエルの再建にとりかかったのは、ペルシア王キュロスの時代以降のことです。キュロスの捕囚民への帰還許可の布告はBC.538年、そしてエルサレムに第二神殿が完成したのはBC.516年で、これが預言者エレミヤが語った“バビロンの70年”であります(エシ 29:10、代下 36:21 参照)。

この再建のイスラエルはその後120年程して、BC.4世紀初め頃に祭司エズラが公布した律法の書によって、律法の民として形成されて行きます。このエズラの律法の書が、今日の私たちの旧約聖書の主要部分を成しているのです。

このようにして、再建されたユダヤ人の国は、私たちが今日持っているのと同じ旧約聖書によって、神の民イスラエルとしての生き方を学んで行ったのでした。そのユダヤ人たちが、神の民イスラエルとしてのアイデンティティーの基本的条件として理解したものの一つに、安息日の規定がありました。今朝の申命記のテキストは、この民が主の民イスラエルであることの“しるし”としての安息日について、ここで熱っぽく語っているのです。

### 2. マコ

しかし、今朝の福音書のテキストは、新しく誕生したキリスト教会が、そのようなユダヤ教の安息日規定に対してどのような理解を持ち、どんなふうに対応したかということについての、初期の頃の情報の一部を提供してくれています。そこで私たちが読むことができるのは、「だから、人の子は安息日の主でもある」(2:28)と、「安息日に律法で許されているのは、……命を救うことである」(3:4)という二つの主張であります。

キリスト教会はそのごく初期の頃にユダヤ教と決別するのですが、その理由の中で特に重要なものが、旧約の律法に対する理解と対応の根本的な違いでありました。当然その中には、安息日についての問題も含まれていました。

### 3.

キリストの福音と旧約の律法の問題というものは、新約聖書の中でもいろいろと取り上げられてい

る重大問題であります、さらにキリスト教の今日に至るまでの歴史の中でも、重要な神学上の問題であり続けて来ました。

今日の主日の朗読配分を例にとって言えば、先ず旧約聖書からは申命記5:12~15が朗読されました。これは再建のイスラエルを教え導くための、“安息日の律法”の根拠についての解説であります。主の民イスラエルは、かつての出エジプトによって神が贖い出された民であります。現在のイスラエルにとっては、それは遠い昔の先祖の時代の出来事なのですが、しかもそこで起こった主の救いは、再建のイスラエルが安息日を聖別して守るという行為によって、かれらの現在の体験として再現されたのでした。

このような、“神が御自分の民を救い出された大いなる御業を記念する”という理解を、私たちキリスト教会はミサによって今日受け継いでいます。何故ならミサはキリストのいけにえの再現であり、キリストの死と復活の記念だからです。「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」(レオ秘跡書)。

しかし続いて朗読されたIIコリで、使徒パウロは「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光」(v.6)へと私たちの姿勢を向けさせるのです。律法の書にではなくて、十字架と復活のキリストに顔を向けることが、新しいキリスト教会の歩み方です。新しく誕生した群である教会……、キリストの祭壇を囲んでミサをささげる群である教会は、律法の民ではなくて福音の民となったのです。

このように今日の主日の朗読に導かれて、私たちはマコ2:23~3:6を理解するのです。そこには律法主義ではなくて、イエス・キリストによる救いがあります。旧約の律法は決して不要になって捨てられたのではなくて、その律法のさらに上に立ち給う救い主イエス・キリストが私たちを顧みておられます。このイエス・キリストによって、私たちは代々の聖徒たちと共に、“罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じ”ているのです。       ハレルヤ、アーメン。

## 3月12日 四旬節第1主日

創 9:8～15    1ペト 3:18～22    マコ 1:12～15

### 1. 1ペト

主イエス・キリストは、私たちを罪と死の世界から救い出して神のもとへ導く業を、“主にその過越の神秘によって成就されました。” 主キリストは“御自分の死をもって私たちの死を打ち砕き、御自分の復活をもって私たちにいのちを与えてくださいました。”(典礼暦年の一般原則 18) 私たちは洗礼の秘跡によって、この救いに与かっているのです。

このため、主の受難と復活からなる過越の聖なる祭儀は、教会の一年間の祭儀の頂点をなすもので、私たちは四旬節の6回的主日のミサによって、これに備えて行きます。

今朝の使徒書の朗読の中で、私たちは創世記のノアの洪水の物語りへの言及に続いて、次のように聞かされました。

v.21 「この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。」

洗礼によってキリストの救いに与かる……、あるいは与かっているということは、私たちキリスト者とこの世の人々とを区別する事柄であります。

v.21 後半の「正しい良心」という言葉は、ややあいまいな表現かもしれませんが、キリスト者が受けた“罪と死からの救い”と“神の国への復活の希望”に固く立つ心の姿勢(心構え)、と理解するのが適切だと思います。私たち信者は、“既に受けた洗礼とイエス・キリストへの信仰”によって、この世の人々から区別されていることを、特にこの期節に、十分に自覚したいと思います。

### 2. マコ

私たちが普段何気なく使っている“信仰”という言葉は、今朝は意識してみましょう。

イエスの宣教の第一声として、マルコによる福音書は「福音を信じなさい」という言葉を記録しています。これは単なるイエスの言葉の記録というよりも、むしろマルコによる福音書を生み出した初代教会の“信仰理解”と考えるべきでしょう。そうです……、“信仰”とは“福音を信じる信仰”なのです。そしてその“福音”はマコ 1:1にあるように、「神の子イエス・キリストの福音」であります。

この福音は、「神の国が近づいた」と密接に関わっています。“福音を宣べ伝える”ことと“神の国を宣べ伝える”ことは、新約聖書では同じ意味で使われています。そしてそれにもう一つ、「悔い改めて……」という言葉が結びついています。このように、私たちが聖書を通し、また教会を通して教えられる“信仰”とは、「神の子イエス・キリストの福音」と決して切り離すことの出来ないものなのです。

この世の中にはいろいろな宗教や信心がありますが、私たちキリスト者の信仰は現象としてはそれらと

似ていたり共通する面があるにしても、根本的なところで決定的に異なっています。信仰というものは、その信ずる対象が異なれば、現象としては似ていても、根本的には全く別のものになります。当然そこで語られる“救い”も、全く別のものだということになります。

私たちは他の救いではなくて、“イエス・キリストの救い”を信じているのです。私たちは“罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じ”ているのです。

### 3.

私たちは今年も四旬節のミサを守り始めました。それはイエス・キリストの救いの頂点である受難と復活の祭儀を準備する期間です。「四旬節の典礼によって、洗礼志願者はキリスト教入信の諸段階を通して、信者はすでに受けた洗礼の記念と償いの業を通して、過越の神秘の祭儀に備えるのである」(典礼暦年の一般原則 27)。

今年も復活の主日を、会衆の大いなる“アレルヤ”で祝うことが出来るように、一緒に備えて行きましょう。       アーメン。

## 3月19日 四旬節第2主日

創 22:1～18    ロマ 8:31～34    マコ 9:2～10

### 1. マコ

イエスの12人の弟子たちの中で、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人は、特に主イエス・キリストの福音の重要な証人として、福音書の中で語られています。その三人が、この山上でのイエスの変貌の出来事を体験したのでした。説明することの困難な、しかし神の大いなる「秘められた計画」(エフェ 1:9, 3:3 以下、コロ 1:26-27 参照)をかいま見る体験をした後、彼ら三人は雲の中から語られる父なる神の声を聞いたのでした。

v.7 「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

私たち教会は、この使徒たちの証言を通して、今朝この神の語りかけを聞いているのです。

### 2.

今朝の集会祈願では、この v.7 を取り上げて、「聖なる父よ、あなたは“愛する子に聞け”とお命じになりました」と、祈り始めています。

そこで、この「私の愛する子。これに聞け」という語りかけについて、一緒に学んでみたいと思います。

キリスト教は一つの“ケリュグマ(宣教)”から始まったのでした。紀元30年頃、パレスチナにおいて、使徒たちが復活の主から受けて、同時代の人々に宣べ伝えた“宣教”から、すべては始まったのでした。それは少し前に起こった一連の出来事が、神の救いの行為であったという“宣教”です。

…… イエスは神によってこの世に遣わされた。ゴルゴタにおける彼の死は、単なる普通の人の殉教の死、一人の人物の英雄的な死などではない。そうではなくて、神がこのことを通して人間に罪の赦しを提供された、偉大な贖いの行為であった……、

という“宣教”です。復活されたイエスが使徒たちに現れてこのことを理解させ、聖霊を与えて彼らの“宣教”を導き始められました。同時代の人々がこの宣教された福音を信じて受け入れることは、また彼らも聖霊を受けることと密接につながっていて、このようにして彼らは救われた人々の共同体である教会に加えられて行きました。彼らにとって、「私の愛する子。これに聞け」とは、この“宣教”を信じて受け入れることであったのです。

この最初の使徒たちから始まって、代々の教会が使徒継承によって受け継いで来た“ケリュグマ(宣教)”を、今日の私たちは二つの形で持っています。その一つは“新約聖書”であり、もう一つは初期の“キリスト教信条”です。

### 3. ロマ

…… 私たちのために、父なる神はその御子を罪の赦しのためのいけにえとして提供され

た。イエス・キリストの死に与かり、その復活にも与かる洗礼を受けた私たちは、今や神に選ばれた民であり、神はこれを義としてくださる。主日ごとにキリストの祭壇のもとに集まってミサをささげている私たちキリスト者を、復活のキリストは今日も神の右の座から執り成してくださっている……。

使徒パウロがここで語っていることは、初代教会の“ケリュグマ(宣教)”と一致しています。そしてその“ケリュグマ(宣教)”は、ミサに参加するすべての人々をキリストの奉獻に結びつけ、人々が自分自身をキリストのいけにえに添えてささげるように、教え導き育てて行ったのでした。

#### 4.

現在、我が国の殆どすべてのカトリック教会のミサで、説教の後に会衆が唱和するのは、“洗礼式の信仰宣言”です。理由は単純に“いちばん短い”からです。しかしこのことは考え直す必要があるのではないのでしょうか。

各個教会によってその使用はまちまちなのでしょうが、“ともにささげるミサ〔ミサ式次第 会衆用〕”には、“洗礼式の信仰宣言”と並んで“使徒信条”と“ニケア・コンスタンチノーブル信条”が収録されています。“キリストと我等のミサ(改訂版)”(1991年改訂初版)では、題名なしの形で“洗礼式の信仰宣言”と“ニケア・コンスタンチノーブル信条”の二つが載せられています。

この“ニケア・コンスタンチノーブル信条”は、キリスト教の歴史、特にその教理の歴史において非常に重要な位置を占めて来たものです。特に教会が使徒継承によって受け継いで来た“ケリュグマ(宣教)”の理解についての“東西両教会が共有する信条”であるということに、注意を喚起したいと思います。その教会が(東方にせよ西方にせよ)自らを“一・聖・公・使徒継承の教会である”と主張するとき、必ず告白しなければならない信条が、この“ニケア・コンスタンチノーブル信条”なのです。

今朝の創世記のアブラハムとイサクの物語りを、決してアブラハムの単なる個人的な信仰の称賛の物語りとしてではなく、父なる神が御子イエス・キリストを私たちの贖いのために与えてくださった救いの出来事を指し示す物語りとして読むためにも、またさらにそのアブラハムの信仰を、ミサにおいてキリストのいけにえの奉獻に一つに結ばれる私たちの信仰の手本として読むことを教え導くためにも、“ニケア・コンスタンチノーブル信条”は大きく貢献するのです。

「これはわたしの愛する子。これに聞け」とのみ声を聞いた教会が、それを現代の教会が使徒継承によって受け継いで来た“ケリュグマ(宣教)”に注目するようにとの神の呼びかけであると理解し、その一つの啓蒙的な手段として、私たちのミサでも“ニケア・コンスタンチノーブル信条”を大切にすることを考えてみてはどうでしょうか。イエス・キリストの救いの頂点である受難と復活の祭儀を準備するこの期節に……  
アメン。

## 3月26日 四旬節第3主日

出 20:1~17    Iコリ 1:22~25    ヨハ 2:13~25

### 1. ヨハ

私たちの主イエス・キリストは人々の手によって十字架にかけて殺され、葬られ、三日目に死人の中から復活して、私たちすべての者の救い主となられた方です。私たちはこの救い主イエス・キリストの贖いの血によって救われ、ミサをささげる民の中に加えられて、罪の赦しに与かっています。さらに私たちは、神の国への復活の希望を抱いて、この復活の主の再臨を待望しつつ歩んでいます。

今年も四旬節のミサを守っている教会は、特にこの期節に、主イエス・キリストの受難と復活からなる大いなる救いの御業に心を向けるのです。

主イエスが地上を歩まれた当時のエルサレム神殿は、ヘロデの神殿と呼ばれ、たいへん大規模で美しい建物でありました。既に46年も建築工事が継続していて未だ完成していなかったことから、その大きさを十分に想像することが出来るでしょう。「この神殿を壊して、三日で建て直す」などということは、とうてい考えてみることも出来ない不可能事でありました。だからこそ、ヨハネによる福音書は、これを主イエスの受難と復活の出来事の重大さを示すために対比させているのだと思います。「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」(v.21)は、“それほど重大な、人間の知恵や能力ではとうてい不可能なことを、神は御自分の教会を贖い取るために行われた”というふうに読まねばなりません。

### 2. 出

十戒というのは、神が古きイスラエルに与えられた律法です。しかし新しいイスラエルである教会は、これを自分たちにも神のことばを語る戒めとして、古くから大切にきて来ましたが、しかしその際に、教会はこれをイエス・キリストの受難と復活の福音の光に照らして、再解釈して読んで来たということを強調しておきたいと思います。

vv.2-3 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

かつて古きイスラエルを出エジプトによって導き出された同じ神が、御子イエス・キリストによって、その受難と復活を通して、私たち教会を贖い取られました。私たちはこのイエス・キリストを通して、父なる神を愛し、信じているのです。

この教会は、旧約聖書の語っている安息日に代えて、週の初めの日をミサを守る日として祝うようになりました。それはこの日が主イエス・キリストの復活された日であり、教会はこのキリストの新しい契約に与かって神の国を待望する民となったからです。そのようにして教会は、vv.8-11 を新しい教会の祝日である“主日”に当てはめて解釈するようになったのです。

### 3. Iコリ

w.22-23 「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」

私たちの福音は主イエス・キリストの福音であり、主の十字架と復活によって実現した福音です。それは罪の赦しと永遠の命の福音であり、信する者を神の国に復活させてくださるのです。

主イエス・キリストは、十字架上に死んで葬られただけではなく、死者の中から復活して、私たち信する者の将来の復活の初穂となりました(Iコリ15:20 参照)。

「信じる者の力である神よ、あなたは祈り、節制、愛のわざによって、わたしたちが罪に打ち勝つことをお望みになります。弱さのために倒れて力を落とすわたしたちを、いつもあわれみをもって助け起こしてください。」(今朝の集会祈願)                      アーメン。